



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	養護教諭の専門職的自律性とワーク・エンゲイジメント(審査結果の要旨)
Author(s)	籠谷,恵
Citation	
Issue Date	2016-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2309/145695
Publisher	
Rights	

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本研究は、質的研究と量的研究の両方を用いた混合研究法デザインにより、養護教諭の専門職的自律性の尺度開発を行い、その妥当性と信頼性を検証し、ワーク・エンゲイジメントとの関連を明らかにしようとした意義深い研究である。養護教諭の歴史は長いですが、その基盤を支える養護学は若い学問領域である。しかも、養護教諭は日本独自の職種である。そのため、その専門職的自律性を包括的に定義し測定する研究は、これまで日本では行われてこなかった。

そこで、籠谷氏は、養護教諭のルーツの一つである看護職の専門職的自律性の国内外の文献をレビューし、さらにインタビューによる質的データの分析を行って、概念枠組を作成し、量的に測定できる尺度を開発する研究に取り組んだのである。

専門職的自律性の研究は、養護教諭の専門性確立の観点から、かねてより重要性が指摘されてきたものの、未開拓の領域であった。この課題にチャレンジした籠谷氏の研究は、養護学におけるパイオニア的な意義ある研究であり、独創的研究であると言える。

また、開発した尺度を使って、ワーク・エンゲイジメントという、養護教諭が仕事にやりがいを感じ、熱心に取り組む、仕事から活力を得て生き生きしている状態との関連を明らかにすることも目指している。自律性を持った働き方が、生き生きと働きポジティブな心の状態と関連することを実証的に示すことを目的とした意義ある研究だと言える。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

尺度開発のために質的研究と量的研究の両方を用いる混合研究法デザインは、最近注目されている研究デザインである。この混合研究法デザインを用いて、尺度開発研究を行っており、先進的で妥当な研究方法を採用したと言える。

さらに、尺度開発では欠かせない探索的因子分析と確認的因子分析においても、Mplus という日本ではまだ使用する研究者が少ないソフトウェアを使って、カテゴリカル因子分析を行っている。カテゴリカル因子分析は、順序尺度で測定され正規分布を想定できない変数の因子分析を行う際に、近年推奨されている統計手法である。この統計手法の選択も、適切であり、尺度開発に関する統計的な理解も十分にあることを示している。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

尺度開発において質的研究と量的研究の両方を行っている。質的研究に用いた対象者は、その研究目的にそって適切な意図を持って抽出されており、その質的な分析方法も適切である。

また、量的研究の対象者は、学校一覧を使ってランダムに抽出された関東地区の学校に勤務する養護教諭であり、適切なサンプリングが行われている。統計解析に関しては、先に述べたように、順序尺度で測定され正規分布を想定できない変数の因子分析を行う際に、近年推奨されている、カテゴリカル因子分析を使用するなど、優れた先進的な手法を用いて解析している。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

第1章、第2章では、量的研究に先立って、文献検討とインタビューによる質的データから養護教諭の専門職的自立性の概念構成を行っており、養護教諭の仕事の文脈にそい【裁量】【協働】

【職業倫理】【成熟性】【変革】の5つの構成概念を明らかにしている。これらの考察と結論は、文献とインタビューデータに基づき、堅実に行われている。

第3章では、第1章、第2章で示した多元的な構成概念の枠組みにそって、量的調査により尺度開発を行っている。裁量領域（19項目）は5因子、協働領域（12項目）は2因子、変革領域（11項目）は3因子、職業倫理に相当する職業的精神領域（18項目）は5因子、成熟性領域（8項目）は3因子の合計68項目から構成される複雑な尺度ではあったが、それぞれの妥当性と信頼性について、適切に分析し、考察と結論づけが行われていた。

第4章は、開発した尺度を用いて、ワーク・エンゲイジメントとの関連を検討し、分析で明らかになった関連性について、養護教諭の仕事と取り巻く環境の文脈から、適切に解釈され、結論づけられている。

そして、各章を通じて、今後の研究課題についてもよく踏まえて考察されており、本研究が普遍化できる範囲もわきまえており、適切であった。

籠谷氏の研究は、分析から得られた結果、それに対する先行研究や養護教諭の仕事と取り巻く環境の文脈を踏まえた考察、そして導き出された結論に至るまで、学術的に優れた水準に達していた。

（5）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

適切な研究方法に基づき、専門職的自律性の概念とそれにそった尺度開発が行われており、作成された尺度は、養護学の領域において今後の研究の発展に寄与すると考えられる。また、養護教諭の専門職的自律性とワーク・エンゲイジメントの関係を明らかにしたことは、養護教諭の生き生きとした働き方、ポジティブなメンタルヘルスに対する対策を考える上で、意義ある成果だと言える。

以上のことより、籠谷氏の研究は、東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）の学位授与にふさわしいものであると審査委員が全員一致で認めた。